木村文助研究

通信　２０号　　２００９・１１・５

リーフレット「木村文助の足跡」作成

～「赤い鳥」復刻版展示一〇年～

「赤い鳥」は住民の浄財で購入したものだ。その際赤い鳥基金を創設し運用している。

このほど手作りに加え、基金で五百部作成した。北斗市郷土資料館（大野地区）及びコーナー、公民館（大野地区）、文化センター（上磯地区）、観光協会、函館図書館、森町図書館などへ置かせて貰い、関心を深めてもらう願がある。

色は黄色で見開きA版、三つ折六ページにした。「文助ゆかりの地」

「赤い鳥・木村文助」コーナー

「木村文助の生涯」

「文助の著書等」

そして「文保研の活動」が盛られている。

木村文助の足跡

生活綴り方の先駆者

方言を交え率直な大野の綴り方は全国に読まれた

〇九

五・七　「木村文助研究」通信No.１９号発行

六・二四　ノンフィクション作家合田一道氏森町図書館へ調査に入る。文保研作成リーフレット「木村文助の足跡」図書館へ寄贈。合田氏、北斗市郷土資料館「赤い鳥・木村文助コーナー」見学～二五日も

七・一六　合唱劇実行委員会・郷土資料館

七・二三　北斗市教育広報「きらめき」⑬号連載『赤い鳥』に載った郷土の作文「死人（推奨）大野小尋五　吉田孫七」

通信２０号に到達して

第一号は２０００年６月２０日発行だった。内容は「赤い鳥」復刻版を全巻購入したこともでもあり、入選した児童名・題名の全五九編を紹介した。木村文助や大野の綴り方を研究されている仏教大学岡屋昭雄先生を知り、研究資料を頂いたことも載っている。

爾来年二回のペースで発行した。皆さんからお便りや貴重な本など頂いたりで、講演会を開くきっかけにもなった。感謝である。

2009永遠にあかるく音楽会

１２月２０日・日　午後二時　北斗市総合文化センター

音楽会会場

■第一部構成劇「私のふるさと」
　合唱／赤とんぼ・我が大地の歌
　郡読／イマジン・石川啄木詩集より
　朗読／木村文助“綴り方教室”作品
　劇／わたしの“ふるさと”他
■第二部合唱劇「注文の多い料理店」
　原作／宮沢賢治
　作曲／萩　京子
○チケット　１０００円
○演出・監督、出演らは地元の方々で、練習を重ねている。
●主催　２００９永遠にあかるく音楽会実行委員会

綴り方は朗読に二編入り、小・中学生が読むという。大正・昭和の大野村のようすを思い浮かべるに違いない。綴り方が劇構成の一翼になるのは初めてであろう。期待される。主催者は１千人の動員を目標にしているようだ。

実行委員会では前号でも記したが二年後を目指し「木村文助・綴り方教室」の合唱劇公演の準備作業に取り掛かっている。

「赤とんぼ」は三木露風が当別の修道院へ講師で赴いたが大野平野を眺め作詩したと言われている。

今北斗市の作業車がメロディーとして街を流している。当別地区の住民から放送塔から流れる午後５時の音楽も「赤とんぼ」にしてほしいと要望が出されている。市の歌としてもいいのだが。

連載

『赤い鳥』に載った郷土の作文

大正から昭和の初めに、童話作家の鈴木三重吉が発刊した児童文芸誌『赤い鳥』に掲載された大野小児童の作品を紹介します。大野小は当時、木村文助校長が子供たちの綴方(作文)や絵を投稿し次々と入選。「日本一の綴方学校」といわれました。

死人(推奨)

大野小尋五　吉田孫七

このことは、この間お婆さんから聞いたし、私も少しはおぼえていたことです。或日の晩方(夕方)、中田の信が、裏へ「母、飯(ご飯)だぁ」と言って行きましたら、いつでも「おう」と返事をする母の声がきこえないで、橋の上に草鞋と鎌があって、誰もいなかったそうです。信は母が少し前から、おかしくなって(気が変になって)いたのを聞いていたから、びっくりして家にとんで来て、このことを教えたので、中田の人がみんなでさわいで出て探したそうです。

丁度その時、橋から二町ばかり下の米田(水田)で、雑倉をたてるので、みんなで川ぶちに風呂を立てて(沸かして)かわるがわる入っていると、上の方で、チャポン、ヂャボヂャボと音がして、何だか川の中を流れて来たが、ちょっと人の顔が見えたので、中田の向かいのお父がびっくりして「あっ、あれや中田の母だ」と言うか言わないうちに、顔がかくれたが、ほかの人々はどやどやと入って、川の中から引き上げ、すぐに家につれて行って、医者に見せましたが、まるで死んだようになっていたそうです。中田のお婆さんは「なして(どうして)こういう体になったば(なったのか)」と言って、おいおい泣きました。

それから夜になって、私の家で、夕飯を食べてしまって、中田の話をしながら寝ようとしていたら、中田でまた泣き声が聞こえるので、お婆さんと、おじいさんが行ったら、また母の姿が見えないというのでした。中田の人からきけば、先の病気もかなりなおって、一人でむりに便所へいったのだそうです。そしてしばらくたったら、がたん、という音がしたので、爺さんが走って行って見たら、蝋燭が今消したばかりになって誰もいません。そこで大さわぎになって、そこら(そこいらの)近所の人が提灯をもって川の中を足でさぐったり、たいまつで探したりして歩きました。

そうしているうちに、夜があけました。中田のお父ちゃが、もしや河原へ行ったのではないかと思って、ずっと行くと、一間もはねて行ったような足あとや、這ったようなあとがあったので、ずんずん行って川上の方を見たが何も見えません。それで下の方へ行ったら、土橋の少し上の方の寺の淵で、爪でかいて丘へ上がろうとしたあとがあって、少し下の方に行くと、はたして死んでいました。ひじの皮がむかれて(むけて)、爪の間に土がはさまり、髪がながく、だらりとなって、幽霊のようになっていたそうです。それから幽霊が出るという話があり、女などが通れなくなりました。

(大正十五年五月号)

■ことばの意味

【草鞋】わらで編んだ履き物。

【二町】一町は六十間で約百九メートル。二町は約二百十八メートル。

【雑倉】雑物を入れたり、作業などをする倉庫。

【一間】約一・八一メートル。

【土橋】土をおおいかけた橋。

【淵】川の深くなった所。

※「母」「飯」「お父」は、いずれも当時の方言の発音に合わせてふりがなを振っています。

綴方選評

鈴木　三重吉

吉田孫七君の「死人」は、近ごろでの傑作です。材料的にも特別な異彩をもっている上に、はじめからおわりまでのすっかりの叙写(順を追った表現)が、さもフィルムでも写し出したように、まざまざといきおどっています。その卓出した活写の手ぎわにはおどろかれます。つまり写象(心に浮かんだ客観的内容)に対する把握がしっかりしており、感受がこまかく鋭敏で、表出にも、むだとたるみとがちっともないからです。こうしていかし描かれた、あのあわれなきちがいのおかみさんの運命と、その人によって家中や、村の人々の間に投じられた、感情の陰暗(暗さ)と激動とに、人間としての深刻な価を持っているところが貴いのです。

その活写の一例としては、おかみさんが、川にとびこんでぶくぶく流れて来るところを一人のおじさんが見つけ出して、びっくりして声をたてると一緒に、おかみさんの顔がかくれる、それと言ってみんながどやどやはいって引き上げる、あそこのところの、いきもつかせないあの引きしまった叙写や、それから特にしまいの方で、とび出した狂人をさがしさわぐところで、夜があけはなれたころ、河原へ下りて見ると、砂の上に、一間もある歩幅でとんで走ったような足あとや、はい歩いたようなあとがついていたり、丘へかなぐり(荒々しく)上ろうとして爪で引っかきしたあとがあったりするところや、それから、間もなく見つけ出した死体について、「ひじの皮がむけ爪の間に土がはさまり、髪がながくだらりとなって幽霊のようになっていた」という叙出などは、いかにも現場でじかに見るように実感的な印象を刻まれます。まったく、うまいものです。

(教育課　八木橋直弘)

※　漢字や仮名遣いは現代風に改めています。方言などわかりにくい表現は、かっこ書きで補足しました。

赤い鳥・木村文助コーナー
（北斗市郷土資料館内）

０４１－１２０１
北海道北斗市本町２００
TEL（０１３８）７７－６６８１

閲　覧　９：００～１６：００
休　館　年末・年始

○函館方面→車で、国道２２７号を通り大野市街地へ入る
○道北方面→車で、国道５号の大沼トンネルを抜け、１０分ほどして大野方向へ右折し、更に市街地へ進み５分で着く

大野地区市街地の大野小学校門を入り右側木造の建物

発行・大野文化財保護研究会
（略称；文保研・ぶんぽけん）
会長；木下寿実夫
〇四一－一二〇一
北斗市本町六八
（０１３８）７７・８５３５